

武田泰淳「流沙」の典拠と方法

Sources and Methods of Taijun Takeda's Shifting Sands

孫 森*

Sun Sen

(要旨)

1907年のイギリスのスタインをはじめ、列強各国の探検隊が次々と敦煌を訪れた。敦煌文物の発見・流出に伴い、「敦煌学」「西域熱」が誕生し、学界の関心を集めてきた。仏教出身の武田泰淳も長い間にわたってスタインの著作（Ruins of Desert Cathay、Serindiaなど）を含む敦煌資料を耽読し、その分野に進出して来た。本論は武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「人物ごと」、「全体」という三つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を分析した。

キーワード：流沙 敦煌 典拠 方法 スタイン 換骨奪胎

はじめに

武田は敦煌と深いつながりがあると思われる。東京大学の宗教学科を出た大島泰信（武田の父¹）はかつて「敦煌の文献があったら、みんな買っておけ」²などの忠告を武田に与えた。浄土宗第一期海外留学生としてドイツ留学十年に及んだ武田の伯父渡辺海旭はオックスフォード大学から同大学出版のSerindia（『セリンディア』）³などのStein（スタイン）⁴の著作をもらった。伯父、父の死後、武田は『セリンディア』などを譲り受けた。恐らく父、伯父からの影響を受けたのであろう、武田は長期間にわたって敦煌に関心を持っていた。大学時代において、武田は「敦煌の資料が発掘され、公刊されていた頃だから、『大正新修大藏経』などと読み合えれば、いくら

か目をおどろかす論文も書けそうだった。ウジウジしている東京帝大の漢文学科を攻撃するのも、愉快だった。」⁵この発言から、当時武田が敦煌学者を目指していた様子がうかがえる。「中国文学研究会」を設立した後、1935年12月発行の雑誌「中国文学月報」（第十号）に発表された「今年度の中国文化（国学）」において、武田は「書誌学」に触れる際に「（前略）各国の敦煌発掘本の報告に注目し、海外学者の研究を常に重要視している国際的態度には敬服すべきものがある。」⁶と敦煌研究に言及した。1936年4月発行の同誌に発表された「唐代仏教文学の民衆化について」において、武田は「（1）敦煌本の俗文・変文と漢訳藏経の本縁部説話の比較、（2）敦煌本の俗謡と浄土教讃詩の比較を行って仏教民間文学の形式」⁷を分析した。1937年から

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

華中戦線に送られた武田は「戦地に駐屯しているとき、(中略) もともとあまり文学書は買わなかったし、大正新修大蔵経の民間仏教の部や、ウィットホーゲルの支那経済学、そして何よりも、次から次へ発見される敦煌発掘の資料などを読みふけていた。」⁸と述べているように、相変わらず敦煌に夢中になっていた。

「とても自分は小説なんか書けるものじゃないから、まあ学者のほうで、敦煌の文献でもいじってれば、なんとか食えるであろうと」⁹ 武田は最初思っていたが、1952年雑誌「文芸」に武田文学における唯一の、敦煌を舞台にし、スタインの探検調査を取り扱った小説である「流沙」¹⁰を発表した。主人公蔣(実名：蔣孝琬)が英国の考古学者スタインとインドの回教徒シンたちと一緒に敦煌を訪れ、漢代の長城遺跡の発掘調査、千仏洞の調査を行ったことなどを描いた。

本小説をめぐる、『群像』1952年第七巻第三号に掲載された青野季吉・佐藤春夫・中村光夫による創作合評(58回)の「武田泰淳のアイロニー」において、青野季吉は、「何か東洋的なものを描きたかったのだろう」¹¹と、直接の創作の動機が「相当うまく書いてある」¹²「あの『蔣』という中国人」¹³を書きたかっただろうと推測し、主人公蔣が「結局嘘ばかりついているのだが、しかしそれは日本の僕らの観念による「崩れ」じゃないんだな。」¹⁴と、崩れながらも強いようなところがある蔣の人物像を述べ、佐藤春夫は、「だから悪く言うと『流沙』は書物から来た材料をこなしたというペダンティックな興味が多すぎはしないか」¹⁵と手きびしく批評し、「東洋人の捨身のニヒリズムというものね、決して頹廢的でなく生氣横溢して刹那的な生き方が虚無的な」¹⁶と、非常に強く生きて行こうとする東洋人のニヒリズムを説明し、中村光夫

は、「武田君の意図としては、(中略) シュタインの旅行記に対して東洋人としての武田君が持つ一種のアイロニー、それがこの作品のテーマになったのだろう」¹⁷と、西洋または西洋流の学問に対する反撥のような東洋人のアイロニーを指摘した。また、『新選現代日本文学全集27 武田泰淳集』(1960)の「解説」において、佐伯彰一は、井上靖氏の西域物と比べ合わせながら、「『流沙』では、人間の野心や欲情や懸念を素っ気なく無視し黙殺して、ただそこにある砂漠の实在感が、はっきり浮かび上ってくる。中国人の蔣が、いろいろと現実家らしい才覚や観察眼を動かせれば動かすだけ、素っ気ない砂漠という空間が、よけいに動かしがたいものに見えてくる。」¹⁸と本小説での堅固な空間感覚を指摘した。

ただし、研究史の中では、「東洋的なもの」、「ニヒリズム」、「アイロニー」、「空間」といった大まかな論点が指摘されるに留まり、作品と典拠との比較を精緻に行っていない。小説の文末に「Aurel Stein "Ruins of Desert Cathay"」¹⁹及び「Serindia」による所多し。蔣及びシンは実在の人物なるも、作者が自由にその性格と運命を、換骨奪胎したるもの也」²⁰という武田が書き加えた注記があり、作品の原拠に関する情報が知られる。武田はかつて度々スタインの著作に対する関心を表した。例えば、筑摩書房より刊行の短編集『愛と誓い』(1953年)のために書き添えたあとがきにおいて、武田は「Serindiaを全訳したいと思いたったほど、西域熱にとりつかれた時期があった。(中略) 小説書きになろうなどとは夢想もしなかった頃、「流沙」の第一稿を書いた。(中略) 戦後、無理にすすめられて、初稿を全部書き改めて発表した。」²¹と明言している。雑誌「週刊言論」の連載コラム「私の自慢の本」欄に寄稿したエッセイ「私の自慢の本『セリンディア』」²²(1968年)

において、武田は「砂漠、山脈、未開民族の現状、埋め忘れられた歴史を学者風に語ることが、案外、現実世界へ突入する意欲と直結している点も、おもしろい。これからタネをもらって、私は短篇「流沙」を書いた。」²³と述べている。

以上の引用部分から見れば、武田が何度も強調していることは、「流沙」が自慢の『セリンディア』などを原拠として描かれた作品であると言えるのであろう。そうであれば、この小説を研究する際に、武田の示した原拠を調べて、原拠のいかなる部分をどのように作者が利用しているかなどを分析すればよいと思われる。ところが、今までの武田の研究者は、この研究のアプローチをまだ行っていない。

以上を踏まえて、本論は、かつて敦煌学者を目指していた武田が、如何にして典拠を利用して小説「流沙」を描いたのかを詳らかにし、武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法（典拠の利用法）を分析する。

一、典拠の追考と武田の英語力

「流沙」と典拠を比較する際に、前提として以下の二つの問題を整理しておく必要があると思われる。

1、「流沙」の典拠は、小説の追記に「Aurel Stein “Ruins of Desert Cathay” 及び “Serindia” による所多し」という叙述からうかがえるが、「流沙」はこの二つの文献のみから素材を取り入れたとは言い難いので、他の参考文献があるのか、という点は優先して検討しなければならない。筆者の調査した範囲で、Ruins of Desert Cathay（以下Ruinsと略す）、Serindia以外の、武田が読んだ可能性のある、スタインに関する文献を以下のA～Dに記載し、スタインにかかわりがない文

献をFに書き記す。

A、『中央アジア踏査記（アジア内陸叢刊）』（Marc Aurel Stein著；風間太郎訳、生活社、1939.12）

B、Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kansu and Eastern Iran (Marc Aurel Stein、Oxford: Clarendon Press、1928)

C、『斯坦因西域考古記』（Marc Aurel Stein著；向達訳、中華書局、1936.9）

D、①『The Thousand Buddhas: Ancient Buddhist paintings from the Cave-temples on the Western Frontier of China (Marc Aurel Stein、London: Messrs. B. Quaritch、1921)

②『Memoir on maps of Chinese Turkestan and Kansu』from the Surveys Made during Sir Aurel Stein's Explorations, 1900-1, 1906-8, 1913-15 (with appendices by Major K. Mason and J. de Graaff Hunter) (Marc Aurel Stein、Dehra Dun: Trigonometrical Survey Office、1923)

③『Ancient Khotan』Detailed Report of Archaeological Explorations in Chinese Turkestan (Marc Aurel Stein、Oxford: Clarendon Press、1907)

④『Kalhaṇa's Rājatarāṅginī: A Chronicle of the Kings of Kaśmīr』Translated, with an Introduction, Commentary, & Appendices (Marc Aurel Stein、London: A. Constable & Co. Ltd.、1900、2 vols)

F、『回教概論』（大川周明、慶応書房、1942）

続いて詳細をみていきたい。Aについて、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表の「草稿 流沙」（資料番号 T0056446）において、武田は「『S博士の講義集が日本で翻譯されてゐるが、その中にもチャンと、蔣四爺が出演してゐる』と述べている。「S博士の講義集」と

いうのは、スタインがハーバード大学での講義をもとに上梓した、全3回にわたる中央アジア探検の成果を一般向けにわかりやすく解説した旅行記 *On ancient Central Asian tracks: Brief Narrative of three Expeditions in Innermost Asia and North - western China*, (edited and introduced by Jeannette Mirsky) (London: Macmillan, 1933) のことである。Aはこの著作の日本語訳である。「流沙」の主人公蔣はAの中の「蔣四爺」とは同一人物なので、「流沙」とAとの関連性が高いと言えるであろう。

Bについて、武田は「私の自慢の本『セリンディア』」において、『インナーモースト・エイシア』(Innermost Asia)の構成などに言及した。Bはスタインによる第3回中央アジア探検(1913~16年)の調査報告書であるが、「流沙」は第2回中央アジア探検のことを描いた小説である。ゆえに、Bが典拠として用いられた可能性はほんのわずかであると言える。

Cについて、武田の仲間である増田渉は、自分の蔵書を整理した際にスタインの『西域考古記』(向達訳)という本などが出てきて、「これらは確か三十数年前、何かの必要から泰淳氏の書斎で見て、借りてきたものだと思いますが出したが、およそそのような書籍、雑誌にも当時の泰淳氏の研究的(?)態度の一端がしのばれるというものだ」²⁴と述べている。この発言からみれば、武田は『西域考古記』を読んだ可能性があると思われる。Cは先述の *On ancient Central Asian tracks*の中国語訳である。Cにも蔣のことが記述されているが、「流沙」と比較したところ、『西域考古記』(向達訳)は小説の内容と必然的な関係を持っていると認め難いので、典拠資料から除外する。

D①~④について、「武田泰淳コレクシヨ

ン」の中の未発表の「Innermost Asia」(資料番号 T0056709)に「Stein books」を小見出しとしてのメモがあり、このメモにおいて、武田はRuins、Serindia以外D①~④を挙げている。D①はスタインが第2回中央アジア探検において収集した仏画を収めた大型図録であるが、「流沙」には仏画についての描写がないので、両者は相関がないと言ってもよい。D②はスタインの第3回中央アジア探検の報告書であるInnermost Asiaに収められた大型地図の作成に関する覚書である。D③はスタインの第1回中央アジア探検(1900~01)の調査結果をまとめた報告書である。D④は「彼(スタイン、引用者注)が三十七歳(一九〇〇年)の時に出版した有名な『カシミール王統年代記』」²⁵である。「スタイン卿を梵語博士と云わしめたのは」この「労作のあることからと思われる」²⁶。ゆえに、D①~④は何れも小説とは無関係な著作であると言えるであろう。

Fについて、武田は、評論「宗教は統一できるか」(1966)において、戦争中回教を研究する日本の学者たちが「日本帝国の政策として、アラビア、アフリカに進出する必要のため、調査員、研究員としてはたらいのだった。」²⁷と言及し、「東京裁判に出廷し、A級戦犯に指名されて、のちに発狂した大川周明氏にも『回教概論』という著書がある」²⁸と述べている。筆者の確認により、この『回教概論』のある部分の記述は小説の登場人物シンの描写と類似しているため、ひとまず典拠資料として認める。

以上を踏まえて、小説「流沙」の追記に記されているSerindia、Ruins以外、A『中央アジア踏査記(アジア内陸叢刊)』もF『回教概論』も典拠資料として認めたほうが妥当と思われる。ただし、Aにおける漢代長城の調査や敦煌文書の発見など第2回中央アジア

探検に関する多くの記述がRuins、Serindiaと重なっているため、比較作業の重複を避けるために、第二節の論述は、典拠としてのRuins、Serindia、『回教概論』を使用する。

2、「流沙」がRuinsなどを原拠として描かれた小説であると武田が言い切るものの、CiNiiおよび国立国会図書館のホームページで検索すると、日本語訳のRuins、Serindiaは見当たらない（2022年12月30日閲覧）。ゆえに、武田が実際に英語の著作物が読めるほどの語学力を身につけていたのかどうかについては、考察しなければならない。インタビュー「作家に聴く・武田泰淳」（1952）において、武田は「中学は、やはり本郷の京北中学という、不良の多い私立中学だった。みんなが出来ないので、僕は、その中ではよく出来て、ことに英語が一番好きだった。英文学をやるうなどと、真面目に考えていた頃もある」²⁹と述べている。評論「文学を志す人々へ」（1962）において、武田は「中学に入ってから、国語ではなくて、英語の成績が良かったので、英文学でも勉強しようかと、漠然と考えていた」³⁰と記述している。エッセー「文学と私」（1975）において、武田は「そのころ（中学校時代、引用者注）、英語はお経みたいなふうで、得意だったので一時は英文学者になろうかということも考えたこともあります」³¹と述べている。以上の引用文のように、全集の中で武田は自分が英語に秀で、一頃英文学研究者になりたかったことに再三言及している。ゆえに、武田が英語文献が読める程度の英語力を身につけていたと言えよう。武田は中学に入っておよそ二年、父に英語と漢文を夕食後みっちり勉強させられていた。「講義はきわめて丁寧で、聴いていると学力が増進して行くのが、少年にもよくわかった。漢文は十八史略、英語はリーダーの予習。父子ともにその二時間、他の家族

には秘密の楽しさを味わった。」³²とあるように、武田が英語が得意になれたのは、父の熱心な指導が関係していると思われる。また、中国文学を専攻した者としての謙遜や自虐的な意味を含んでいるのであろうか、武田は「草稿 流沙」（資料番号 T0056446）において「英語の本など、ほとんど讀んだことのない私は、犬が星でもみるやうに、呆然と大きなページをめくった」及び「無頼漢が街を歩くやうに私は、品の無い、あばずれた讀み方で、讀むと言ふより、わかる字だけ捨ふやうにして、少しづつ讀んでゐた」と書き記している。この発言により、武田がそれほどすらすらと英語の著作を読むことはできていなかったことが見られるが、中学に入った後父と共に勉強に勤しみ英語に長けていたことは、武田が様々な視点で典拠に基づいた「流沙」を書くことができた大きな要因になったと考えられる。

二、「流沙」と典拠との比較

以上のような認識の元、本節では典拠としてのRuins、Serindia、『回教概論』と「流沙」との比較を行う。全集に収録されている「流沙」は五つの節に分けられ、一節ごとに1行空けられている。検討の便宜のために、筆者が各節に、通し番号、見出し、頁数を記して比較を試みる。ただし、「草稿 流沙」（資料番号 T0056446）によれば、武田はスタインの著作を読んでいたところ、「数年にわたる沙漠の旅をした」中国人「チャン・スウ・イエ」（蔣）という「面白い人物を発見した」。また、武田が「この男のことを書いて小説にしてやらうかしら。私はすぐ、そんな風に氣を廻した。（中略）つまり私は砂の中から、一支那人人物を発掘せんとしてゐた。それはS博士にもまけぬ発掘であるかもしれぬ」と

述べているように、蔣が「流沙」において最重要な役割を担うことがわかる。ゆえに、本節は武田が「換骨奪胎」した蔣やシンの人物像、また典拠との関係が特徴的である描写を中心に検討し、典拠と「流沙」の間に改変のないものについては言及を略したものもある。比較に際し「流沙」本文は『武田泰淳全集増補版』（1979）第1巻、典拠はすべて初版を用いる。なお作品及び典拠の本文引用は極力省略するが、参照の便を図ってそれぞれの頁数を記す。

1、敦煌の漢代土牆（長城）の調査（315～322頁）

1) S博士と蔣は発見した各木簡に書き記された「永平」、「建武」年号を相次いで確認した（315～316頁）ことは主にRuins (vol.2) 第54章50～53頁に拠り、もしくはSerindia (vol.2) 第15章第3節593～594頁に拠る。ただし、Ruinsと「流沙」のどちらにおいても夜、テントで年号を発見した後の蔣の様子に触れている。Ruinsでは、「We both loudly rejoiced at this discovery, which put us at once on safe chronological ground for further researches. (拙訳：年号を発見して我々二人は大声で喜んだ。この発見は直ちに、一層の研究のための確かな年代順の根拠になった)」とされている。それに対して、「流沙」においては、「『ホウ』蔣はあくびを噛みころしながら、おだやかに微笑をひろげる。『建武でしたか。武の字がどうも古い形なもので、読めなかったんですけど』旅行者らしくない落ち着いた返事であった。踏査用テントでする会話とはみえず、官衙の事務室で上役と書類の文章を相談する口調であった」と記されている。蔣がただ自分の担当する仕事を完成するために木簡の年号を考察し、実際には学問に関心を持っていなかったことを強調するためか、武田は小説におい

て、蔣が官衙の上役と「書類の文章を相談する口調」で悠々と返事したという設定に変更している。

2) 小説では、「故郷湖南省を出てから十余年」、「辺疆を漂泊しつくした」蔣は、「妻子を養い家を構え」といった困難にぶつかった。「人事に対する表面上の無関心と、利害に関する細心の注意。この二つが小役人蔣の沙原の底深く隠匿されていた。故郷へ帰るためには金を貯えねばならぬ。金を貯めるには利益に対する注意の集中、利益にならぬ事には全くの無関心。」(317頁)とされている。典拠として見なしてもよいRuins (vol.2) 第75章275頁において、「Fully three months' journey still separated Chiang from his Hu-nan home, where he had then left behind his wife and newly-born son; and with years still needed to raise his savings to the standard fixed for retirement, he had resolutely put aside all idea of returning to them until the period of exile had come to its appointed end. (拙訳：まる三か月の旅で、蔣は妻、新しく生まれた子供を残して、ふるさと湖南省を遠く離れた。退職後必要なお金を貯めるのに何年もかかるので、蔣は決然とふるさとに帰る考えを捨てて、最後に至るまで異郷で生活した)」とある。小説、典拠のどちらにおいてもお金を貯めるという動機についての記述がある。ただし、蔣の自分の利得につながるかどうかという観点から物事をとらえる現実主義の生き方を強調するためか、武田は「流沙」において「利益にならぬ事には全くの無関心」のような、原拠に存在しない表現を付け加えた。

3) 蔣の服装と体面(317～318頁)はRuins (vol.1) 第12章143～144頁に拠り、作中服装についてはRuinsの記述と、服の色や服の種類等の細部の描写も一致している。

4) 蔣の学問への興味(318頁)について、作中では、蔣は辺疆小役人より博士の秘書のほうが金になり気が楽であるという「現実的な思案」から、博士の秘書になり、「博士の指示に従って態度はいちいち忠実であるが、考古学的な夢など、みじんも持ち合わせがない。年号の文字、記録の内容、それは秘書としての彼の価値をたかめ、傭主の欲望を満足させるに役立つ物件に過ぎない」と描写されている。それに対して、典拠の中では蔣は好学者の人として記述されている。例えば、スタインは探検隊に参加したばかりの蔣を以下のように評価した。「Very soon, with the true historical sense innate in every educated Chinese, he took to archaeological work like a young duck to the water. With all his scholarly interest in matters of a dead past, he proved to have a keen eye also for things and people of this world, (後略) (拙訳: 教育を受けたあらゆる中国人に生まれ付き備わっている真の歴史的な感覚で、彼(蔣、訳者注)は考古学の仕事にすぐに慣れた。過去の物事に学術的な関心を寄せていた彼は、この世界の物や人にも鋭い目を持ち、(後略)」³³ 下線部の内容を読み比べてすぐわかるように、典拠における学問を好む蔣の人物

像と異なって、「流沙」において、学問に興味を全く持たず、ただ現実の利益を重要視し、博士の欲望を満足させるために考古の仕事を進めていたという「現実主義者」である蔣の人物像が描き出されている。

5) 漢代遺物の発見(318~320頁)について、詳しく言えば、革紐で破片を繋ぎ合わせた土器を発見した(318~319頁)ことはRuins (vol.2) 第58章96頁に拠る。ただし、この土器は水が漏るようになってから穀物でも入れるのに使ったらしいという蔣の推測は、典拠に該当する記述がないので、武田が蔣の口を借りて述べた個人的な判断であると言ってよい。漢代の隊長か長官の許可証として使われた木片を発見した(319頁)ことはRuins (vol.2) 第58章94~95頁に拠り、木片についての描写(「真黒」「末端に紐がついてる」など)がほぼ一致している。漢代の地下牢である井戸のそばで罪人を殴る棒を発見した(319~320頁)ことはRuins (vol.2) 第60章119~120頁に拠り、あるいはSerindia (vol.2) 第19章第1節686頁に拠る。注意すべきなのは、先述の土器、木片、棒についての典拠は異なる章にあるが、土器、木片、棒はそれぞれ以下のRuins (vol.2) 第58章96頁と97頁の間に掲載されている写真の中の6、



(写真出所: Ruins of Desert Cathay (vol.2) 第58章96頁と97頁の間)

4、1に該当する点である。ゆえに、写真によって小説の本節の構成をすることができた可能性があると思われる。

6) 亭長、司馬、千人、都尉、長吏、太守という地方役人の官職名(321頁)はSerindia (vol.2) 第20章 第5節745~748頁に拠る。専門の歴史的知識は本格的な調査報告書Serindiaに拠ると言えるであろう。阿片を呑んで睡りこけて出発に遅れて三日ばかり行方不明になっていた二人の中国人苦力は帰った後にS博士に叱られた(321~322頁)ことはRuins (vol.2) 第60章118~119頁に拠る。ただし、S博士の叱責や蔣の慰めの言葉などは付加されたものである。

2、S博士達が敦煌の城内に入り、寡婦やシンが登場(322~327頁)

1) 寡婦が棲息する敦煌の城内の家屋に泊まった(322~323頁)ことはRuins (vol.2) 第51章9~12頁に拠る。ただし、S博士達と同行した「熱烈な回教徒」であるナイク・ラム・シンは、蔣との間には「やや冷たい空気が流れ」、蔣が寡婦とデートする場所の近くで夕べの祈りをささげた(323~324頁)ことは虚構である。また、シンの身分に関しては小説、Ruinsのどちらにおいても「印度の工兵」とされているが、シンの宗教に関しては異なっている。Ruins (vol.1) 第7章65頁において、「I knew well that hard-and-fast caste rules would allow neither Surveyor Ram Singh, the Hinduized Gurkha, nor Naik Ram Singh, the Sikh, to partake of impure Mlecchas' dishes. (拙訳：私(スタイン、引用者注)は、厳しいカーストのルールにより、測量技師であるラム・シン(ヒンドゥー教徒のグルカ人)とナイク・ラム・シン(シク教徒)が不純な異教徒の食物を食べることを許すわけにはいかないということをよく知っていた)」という記述のように、ナイク・ラム・

シンがシク教徒とされている³⁴。Ruins (vol.2)の巻末付録の索引510頁のシンに関する項目において、「refusal to eat Muhammadan dishes (拙訳：回教徒の食物を食べるのを断わる)」とされており、前述の「異教徒」が「回教徒」を指すことがわかる。以上を踏まえて、Ruinsにおいて、シンが回教徒ではなく、シク教徒であると言ってもいいのであろう。

ところが、「流沙」では、小説の緊張感を高めるためか、武田はシンをシク教徒から「熱烈な回教徒」に変更し、シンと信仰が「今でも模糊としていた」蔣、この二人の対立と和合を描写している。また、「流沙」において、シンが清めのために「白い砂を腕にこすりつけ」てコーラン経の一節を誦した(323~324頁)という回教徒の祈り方についての描写は、Serindia、Ruinsには存在しない。前述のF『回教概論』の第六章「回教の儀礼」第一節「清浄」では、「また次の如き場合には、砂を以て水の代える砂浄Tayammumが許される。(中略)砂浄は双手を以て砂を打ち、顔面を撫でること一回、手甲を撫でること三回するのである。」³⁵と砂浄について解説している。したがって、シンが儀礼を行う前の、「白い砂を腕にこすりつけ」る砂浄という設定は、武田が『回教概論』から何らかの影響を受け、肉付けを施し創作したものであると考えてもいいのであろう。ただし、「流沙」で描写された回教徒シンの祈りの仕方と、実際の回教徒の祈り方には何か相違点(例えば、信仰の告白)があるためか、小説が初発表された後、武田は「回教研究者の意見によると、回教徒はこのような祈りはやらないそうである」³⁶と述べている。

辺疆の回教徒は寺院廟堂を破壊し、村々を焼きはらい、女子供を殺戮した(324頁)ことはRuins (vol.2) 第53章40頁に拠る。

2) 博士達は月牙泉、鳴沙の丘に遠乗りに行った(325頁)ことはRuins (vol.2) 第64章160~161頁に拠る。具体的に言えば、湖が寶石となって大地に埋めこまれていた風景、水が砂の膝の間に嬰兒のように抱かれている様子、蔣が何度も斜面を滑り降りた(典拠において、蔣が砂丘の上にかけて登ったのみ)ことなどは、一部の創作を除き、細部の描写(例えば、町から湖までの距離(3哩)、砂丘の高さ(250尺)、驢馬、湖の南岸の寺院など)まで典拠と対応している。

3) お祭りには一万人近くの人出があるため、博士の千仏洞調査の予定が延期された(325~326頁)ことはRuins (vol.2) 第64章の159頁、あるいはSerindia (vol.2) 第21章第1節791頁に拠る。蔣が博士と就職について相談した(326~327頁)ことは付加されたものである。作中では、「蔣は気を変え、旅行終了後の就職の相談にかかった。それは何度も腹をわって、博士に依頼してある。調査旅行中の動きぶりを報告してもらい、どこか立派な役所に勤め口を得ること。これが蔣の念願である。『大丈夫だよ、君、こんなところでまた言い出さなくても』博士は今更ながら、蔣の、高い位置に対する小役人らしいあこがれに驚かされた。新しい口約束で、彼は嬉しそうに下を向く」とされている。典拠において、博士が蔣に勤め口を提供することに関する記述は、例を挙げて説明する。

例1 Mr. Macartney, whose knowledge of everything Chinese is profound, and who can read human character in general with rare penetration, found Chiang both clever and straight, and thought he might do some day as a successor to the Agency Ssu-yeh. This hope would, of course, act as an inducement to my Chinese assistant and mentor to stick to me, and was therefore confidentially hinted at.³⁷

(拙訳: マカートニーは中国人についての認識が深く、大体珍しい洞察力で人の性格を見抜くことができる。マカートニーは蔣が利口で率直で、いつかイギリス領事館の師爺の後継者になれる可能性があると思っている。従って、私(スタイン)はこの昇進の機会を蔣に内緒で伝えた。言うまでもなく、このチャンスは、助手であり顧問である中国人蔣が私に対しての忠誠を尽くす気を起こさせるのである。)

例2 Honest Chiang-ssu-yeh, too, well deserved a special effort on my part. P'an T'ajen's friendship was to be utilized in order to obtain for Chiang the chance of official employment he had vainly striven for ever since he first came to the New Dominion some twenty-five years before. So a detailed report on his former services and all he had done for me was drawn up for submission to the Fu-t'ai or Governor-General at Urumchi, nominally in my name and ending with a recommendation for the grant of official rank. I myself did not expect success from such a document from a mere 'outsider,' and a foreigner in addition.³⁸

(拙訳: 誠実な蔣師爺も、私の特別な世話を受けるべきである。私は潘様との友情を利用して、蔣に官職を担当させるチャンスを探した。蔣は25年前新疆に入ったばかりの頃から官職を得るために努力していたが、なかなか実現できていない。それゆえ、私は蔣の以前の仕事ぶりやしてくれたことを詳しくレポートに書いて、ウルムチの地方長官に提出し、上級機関の推薦をもらいたかった。だが、局外者であり外国人である私の起草したレポートが認められるなんて望めなかった。)

典拠と小説のどちらにおいても蔣が高級役になりたがっていたことについての記述があるが、原拠においてはスタインが昇進の機会を蔣に内緒で伝え、積極的に蔣の官職を探そ

うとしていたとされているのに対して、「流沙」においては蔣が何度も就職のことを博士に依頼するという現実的な行為を行ったとされている。この変更により、小説において、蔣が博士の助けで将来高級役になりたいため、何度も博士に依頼するという昇進への渴望が強すぎる現実主義者の人物像が表現されている。

3、敦煌城の長官は宴会を開いた（327～331頁）

1) 宴会前に博士の撮った県官王大老爺の家族の写真に関する説明（327頁）は、典拠には存在しないが、Ruins (vol.2) 第71章の238頁と239頁との間に以下の写真が掲載されているので、武田がこの写真を見ながら想像力を働かせて王の家族の様子を描写したものであると言えるであろう。ただし、武田は王の家族がその後暴徒に襲撃されたいという悲惨な運命の暗示にするためか、作中では「その華やかな服装がかえって老母を衰えっぽく見せ、ひいては両側にひかえた夫婦をも、わびしい姿にした。（中略）田舎くさい、古色蒼然たる一家」と、その写真のものさびしく感じられる雰囲気を描写している。

2) 宴会中で話題になった、王の長男が日本へ留学したこと、林大人が言う新疆省の役

所の仕事の良さ、税金の問題で敦煌の農民たちが不穏になり治安を維持する駐屯兵の兵力が不十分そうなこと（327～328頁）はそれぞれRuins (vol.1) 第11章133頁、Ruins (vol.2) 第53章36頁、Ruins (vol.2) 第53章35～36頁に拠る。ただし、武田は煩雑さを避けるためか、典拠における日本へ留学した「彭の息子」を登場させず、作品で「王の長男」に改めた。翌日S博士たちが城門へ向かう途中で、頼りなさそうな駐屯兵に会った（329頁）ことは、小説の第4節で農民が暴動を起した時、駐屯兵が頼りなく治安を守れなかったことの伏線にするためか付加したものである。蔣が寡婦に再会していた際にシンが祈りを行った（333～334頁）ことは付け加えられたものである。

3) 蔣は道士の信用を得るために玄奘の崇拜者の振りをし、千仏洞に秘蔵された巻物や絵絹を持ち運んだ（330～331頁）ことはRuins (vol.2) 第64章159頁～第66章194頁に拠り、あるいはSerindia (vol.2) 第21章第3節801頁～第22章第3節824頁に拠る。ただし、作品では、「仕事場の蔣は、仏教信者の振りもする。道士の信用を得るためである。偉大なる唐僧玄奘の崇拜者にもなった」とされているが、RuinsとSerindiaのどちらにおいて



(写真出所：Ruins of Desert Cathay (vol.2) 第71章の238頁と239頁との間)

も、博士が道士に自分の玄奘に対する崇拜を述べ、蔣がそばで説明を補足したと記述されている。武田が博士の玄奘に対する崇拜を作品に採らず、蔣が玄奘の崇拜者の振りをしたと設定したのは、蔣が博士に認められることで勤め口を得たいが為に、「技倆」を示したことを強調するためかと思われる。

4、肅州の長官は宴会を開いた(331～334頁)

1) 敦煌を後にして嘉峪関を通過する時に、博士は蔣の様子をうかがった(331頁)ことはRuins (vol.2) 第75章275頁に拠る。

2) 博士達は護衛兵の付き添いで肅州へ近づき、城内へ入ると酒泉を見物した(332頁)ことはRuins (vol.2) 第76章285～286頁に拠る。護衛兵の様子(軍旗、麦藁帽、馬上銃)、酒泉の景色(苔と孔雀草)などの描写は典拠とほぼ一致している。

3) 肅州での宴会の最中、敦煌の百姓共が暴動を起こしたという電報が到着したが、肅州の長官達が軍隊を出動させなかったので、敦煌の県官王一族は悲惨な運命に遭った(332～334頁)ことはRuins (vol.2) 第76章288～294頁に拠る。ただし、典拠において、電報は宴会の際ではなく、博士達が肅州に滞在した最後の何日かに到着した。煩雑さを避けるためか、武田は宴会の際に電報が到着したと設定している。蔣のような辺疆の役人の悲惨な運命を強調するためか、蔣は敦煌の県官王一族の悲惨な運命が小役人たる自分の運命を暗示すると思っていて絶望に打ち砕かれた(334頁)ことを付加した。

5、蔣は和闐でS博士達と別れ、カシュガルの英国領事館に赴任(334～338頁)

1) 甘州を経て、それから一年間西へ向けて旅を続けた(334頁)ことは、武田が小説の煩瑣さを避けるためかS博士達の旅の経歴をまとめたものである。蔣は和闐でS博士達と別れ、博士の助けでカシュガルの英国領事

館での仕事をもらった(334～335頁)ことはRuins (vol.2) 第91章438～439頁に拠り、あるいはSerindia (vol.3) 第33章第1節1320頁に拠る。ただし、別れた時に、シンは林隊長とねんごろになった寡婦が殺されたことを蔣に伝えた(335頁)ことは付け加えられたものである。

2) 蔣の入ったカシュガルの町はずれに存在するボブラ・穀物・回教寺院などの風景、驢馬や小馬に騎乗した村民・着飾った女達・泳ぎ騒いでいた子供たちなどの姿(335頁)はRuins (vol.1) 第10章121～122頁に拠る。風景・人物などの描写はほぼ一致している。

3) 蔣は領事から金時計をわたされた(336頁)ことはRuins (vol.2) 第97章490頁に拠り、あるいはSerindia (vol.3) 第33章第3節1327頁に拠る。蔣は領事からシンが盲目になったがメッカへ巡礼に発ったことを聞いた(336頁)ことは虚構である。典拠によれば、シンは盲目になってから、メッカへ巡礼をせず、印度に送られて1909年に死んだ。前述の『回教概論』の第六章「回教の礼儀」第五節「参詣」において、「一切の回教徒は、男女を問わず成年に達し、自由の身分であり、精神は健全、而も健康之を許し、十分なる旅費を有し、其上留守中の家族を扶養し得る資力あるならば、生涯に一度メッカに参詣する義務がある」³⁹とあり、武田はこの記述を参照して、盲目になったシンがメッカへ巡礼したと設定している可能性があると言えよう。

4) 作品の結末の神父Hの葬儀(336頁～338頁)はRuins (vol.1) 第10章122～125頁に拠り描かれている。ただし、Ruinsでは、「(前略)the grizzly-haired Chinese shoemaker, the solitary convert whom the old priest claimed, had faithfully kept watch on the house-top (拙訳：(前略)灰色の髪の中国の靴職人は、神父に帰依した人で、屋根を見

て忠実にひつぎのそばに付き添っていた) (Ruins (vol.1) 第10章124頁) と記されているように、中国人信徒が典拠に登場している。ただし、作中の、蔣が神父Hの葬儀に参加した後、「教会」で神父Hに帰依する中国人信徒と交流したことは付加されているものである。

三、典拠の利用法

第二節では具体的に小説と典拠との比較を検討してきた。本節ではそれを踏まえつつ、典拠の利用方法をまとめてみたい。おおよそ次のことが言えるであろう。

1. 節ごとで腑分けすると、小説の第一節は主にRuins (vol.2) 第54章 (あるいはSerindia (vol.2) 第15章第3節)、Ruins (vol.1) 第12章、Ruins (vol.2) 第58章、Ruins (vol.2) 第60章 (あるいはSerindia (vol.2) 第19章第1節)、Serindia (vol.2) 第20章第5節、Ruins (vol.2) 第60章に拠る。第二節は主にRuins (vol.2) 第51章、『回教概論』の第六章「回教の儀礼」第一節、Ruins (vol.2) 第53章、Ruins (vol.2) 第64章、Serindia (vol.2) 第21章第1節に拠る。第三節は主にRuins (vol.2) 第71章、Ruins (vol.1) 第10章、Ruins (vol.2) 第53章、Ruins (vol.2) 第64章～第66章 (あるいはSerindia (vol.2) 第21章～第22章) に拠る。第四節は主にRuins (vol.2) 第75章、Ruins (vol.2) 第76章、第五節は主にRuins (vol.2) 第91章 (あるいはSerindia (vol.3) 第33章第1節)、Ruins (vol.2) 第97章 (あるいはSerindia (vol.3))、『回教概論』の第六章「回教の礼儀」第五節、Ruins (vol.1) 第10章に拠る。

下線部で示されているように、作品構成は一部を除き、大体典拠としてのRuins、Serindia、『回教概論』の構成順にしたがっ

ていると言えるであろう。典拠の構成順と異なる小説の描写の中で特徴的なのは、典拠においてS博士達と別れた後の蔣の経歴について記述されておらず、小説の第五節においてS博士達と別れた後の蔣の経歴が典拠における別れる前の記載に基づいて描写されていることであると思われる。具体的に言えば、先述の二の5の3)において蔣がカシュガルに到着した時の風景・人物の描写、二の5の5)において蔣が神父Hの葬儀に参加したこと、という別れた後の蔣についての設定は、蔣が博士と別れる前のことが記述されているRuins (vol.1) 第10章を模倣しているものである。

2. 人物ごとの典拠の利用法を示せば、

1) 蔣は現実主義者に変貌された。例を挙げて言えば、典拠における好學の蔣の人物像と異なり、小説において蔣は考古学的な夢などみじんも抱かず (前述の二の1の4))、木簡に書き記された年号を確認したという重大な発見に対しても落ち着いた気持ちを表した (二の1の1))。小説で何度も博士に高級役になれるよう依頼し、昇進への渴望が強すぎる蔣の人物像が描写されている (二の2の3))。典拠では博士が道士に自分の玄奘に対する崇拜を述べたとされているのに対し、小説では蔣が博士を満足させようとするために玄奘の崇拜者の振りをし千仏洞に秘蔵された巻物や絵絹を持ち運んだ (二の3の3)) とされている。以上からみれば、蔣は現実の利益を重要視する「現実主義者」である人物像に変容されていると言えよう。

また、前述の二の1の2)で示したように、「流沙」において、蔣の気性を表し象徴となる「沙原」が取り込まれ、「誰が通ろうが砂の原の知ったことではない。人事に対する表面上の無関心と、利害に関する細心の注意。この二つが小役人蔣の沙原の底深く隠匿され

ていた。⁴⁰と記されており、「金を貯めるには利益に対する注意の集中、利益にならぬ事には全くの無関心」という「現実主義者」である蔣の人物像がより立体的に、重層的に造型されている。

2) シンは典拠においてはシク教徒であるが、小説においては「熱烈な回教徒」に変貌されている(二の2の1))。武田はかつて対談「東洋人の知性」において、「大川周明がはじめて日本では、回教研究をやったね。あれは賢かったと思う。この問題が解決できなければ、アジアといっても雲をつかむようなものだから。それ以後、回教については中断してしまっているけれど。」⁴¹と、大川周明氏の回教研究上の業績を褒めたたえながら、アジアを捉えるために回教問題を解決する重要性を強調している。武田が、評論「宗教は統一できるか」(1966)において言及した大川周明氏の著作『回教概論』から何らかの影響を受け、『回教概論』に記述されている「砂浄」、「参詣」に関する解釈をもとにして、小説にシンが宗教的儀礼を行う前の砂浄(二の2の1))や盲目後の巡礼(二の4の3))を行ったことを付加した可能性はある。『回教概論』の研究内容を小説化する作業は、武田が『回教概論』を含む複数の典拠から一部分を取り出し小説を組み合わせたことを証拠立てていると言えよう。

3、全体からみれば、

1) 「流沙」は大部分が典拠に基づいて形象されている。専門の歴史的知識は本格的な調査報告書Serindiaに拠る(二の1の6))が、逸話などは一般向けに解説した旅行記Ruinsの記述をもとに再構成されている。そして、正式かつ体系的なSerindiaより、自然風景・面白いエピソードが豊富なRuinsのほうが多く小説に取り入れられる。

2) 典拠の文字のみならず、写真もよく使

われている。この点に関しては、二の1の5)の漢代遺物の写真と二の3の1)の県官王大老爺の家族の写真についての描写があげられる。「草稿 流沙」(資料番号 T0056446)において、武田が『『せるいんていや』は中央アジアの調査記録で、寫眞が三冊の原文の方にも多数入っている。私は荒涼たる山岳や沙漠と、そこに残された瘠墟の寫眞が気に入って、寫眞を眺めながら、わが身も胡沙吹く中央アジアの曠野に立つ想いがした』と述べているように、写真も重要な素材であると判断してもよいと思われる。

おわりに

1907年のイギリスのスタインをはじめ、列強各国の探検隊が次々と敦煌を訪れた。敦煌文物の発見・流出に伴い、「敦煌学」、「西域熱」が誕生し、学界の関心を集めてきた。仏教出身の武田も「敦煌の資料がたくさん発掘されたでしょう。(中略) そのころ敦煌学というのが最尖端だった。そこへ行けば、才能さえあれば新しく発見できる」⁴²と考えていたので、長い間にわたって敦煌資料を耽読し、その分野に進出してみた。本論は武田と敦煌との関係を切口として、日本近代文学館に所蔵されている「武田泰淳コレクション」の中の未発表資料を参考にして、敦煌題材小説「流沙」の典拠資料を整理し武田の英語力を確認した上で、典拠と小説との比較を行い、「節ごと」、「人物ごと」、「全体」という三つの方面から武田泰淳の言う「換骨奪胎」の方法(典拠の利用法)を分析した。

Serindia、Ruinsはどちらもスタインが自分自身を叙述者として(一人称の語り)、第2回中央アジア探検に関する事柄を伝える著作である。「私の自慢の本『セリンディア』」において、「スタインの大旅行と発掘は、大胆

なる壮挙であった」⁴³と述べているように、武田泰淳はスタインの発掘調査に心を惹かれていた。その一方で、典拠に基づいて描かれた「流沙」において、武田はその素晴らしさを一面的に表現しておらず、蔣を主人公に変更しシンをシク教徒から回教徒に改変し、「換骨奪胎」された「現実主義者」である中国人蔣と「熱烈な回教徒」印度人シンを三人称の語りで大いに描き、アジアを立脚点として西洋人スタインの探検調査を取り扱った。よって、先行論の青野季吉が指摘した武田が「何か東洋的なものを描きたかったのだろう」という推測ははっきりと証明できると言えよう。武田の言う「換骨奪胎」の方法を検討することによって導き出される結論は青野季吉の理解の範囲を出ないが、武田文学における唯一の敦煌題材小説「流沙」の典拠追考と典拠利用法を明らかにすることで、かつて長期間にわたって西域熱にとりつかれた敦煌学者像、Ruinsや『回教概論』など複数の典拠から中国人や回教徒に関する部分を取り出し小説を組み合わせたというアジアを意識してい

た小説家像、といった端倪すべからざる武田の全体像の側面を明確に照らし出すことになるのであろう。

※武田泰淳の作品の引用はすべて『武田泰淳全集増補版』に拠る。引用に際して、旧字は現行の字体に改め、ただし、未発表資料は四角で囲い、原文のまま引用する。傍線は筆者による。引用文において「支那」と表記するものは、原文のまま用いる。引用文以外は一貫して「中国」という呼称を使う。

【付記】

草稿資料の調査・閲覧・引用に際して、その所蔵館である日本近代文学館より、格別のご配慮を賜った。この論をなすにあたって、道園達也先生から論文の進め方などのご指導を頂いた。なお、日本近代文学会九州支部春季大会での口頭発表の際及びその後、浦田義和先生から回教、大川周明に関するご助言を頂いた。貴重なご教示を下された諸先生方に心より感謝申し上げる。

【注】

- ¹ 父、大島泰信の師にあたる武田芳淳の遺言により、武田泰淳は出生時より武田姓を継いだ。
- ² 武田泰淳「僧侶の父－ほんとうの教育者とは問われて－」(1970)『武田泰淳全集増補版』第16巻、筑摩書房、1979年、433頁
- ³ Marc Aurel Stein, *Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*, Oxford: Clarendon Press, 1921. (Reprinted 1980, New Delhi: Motilal Banarsidass) (訳名:『セリンディア:中央アジアおよび中国西端部における探検の詳細報告』)。スタインの第2回中央アジア探検(1906～08)の調査結果をまとめた報告書。本文3冊、図版1冊、地図1冊から成る。スタインの探検はその膨大な遺物・古文書の収集、正確な記録、精密な地図作製などで、最も正統的な探検といわれる。
- ⁴ スタイン (Sir Mark Aurel Stein、1862～1943、

- イギリスの考古学者・探検家)。ブダペストに生まれ、のちイギリスに帰化。1900～16年の間に3回中央アジアを探検し、敦煌などで大量の仏画・文書を発見したほか、古代の東西交通路を踏査した。(参照:旺文社世界史事典 三訂版)
- ⁵ 武田泰淳「文学を志す人々へ」(1962)『武田泰淳全集増補版』第15巻、筑摩書房、1979年、209頁
 - ⁶ 武田泰淳「今年度の中国文化(国学)」(1935)『武田泰淳全集増補版』第11巻、筑摩書房、1978年、137頁
 - ⁷ 武田泰淳「唐代仏教文学の民衆化について」(1936)『武田泰淳全集増補版』第11巻、筑摩書房、1978年、170頁
 - ⁸ 武田泰淳「私の第一評論集『司馬遷』」(1967)『武田泰淳全集増補版』第16巻、筑摩書房、1979年、195頁
 - ⁹ 埴谷雄高・武田泰淳、「軍隊と文学的出発点」

- (対談、1970年)『武田泰淳全集増補版』別巻1、1979年、365～366頁
- ¹⁰ 「流沙」はのち1953年7月筑摩書房より発行の短編集『愛と誓い』に、1959年9月講談社刊<現代長編小説全集>39『武田泰淳集・椎名麟三集』に、1960年4月筑摩書房刊<新選現代日本文学全集>27『武田泰淳集』に、1974年4月新潮社刊『武田泰淳中国小説集』第4巻に収録された。
- ¹¹ 青野季吉・佐藤春夫・中村光夫、『群像』7(3)「創作合評」(58回)、1952年、173頁
- ¹² 同上、174頁
- ¹³ 同上、174頁
- ¹⁴ 同上、174頁
- ¹⁵ 同上、173頁
- ¹⁶ 同上、174頁
- ¹⁷ 同上、174頁
- ¹⁸ 佐伯彰一『新選現代日本文学全集27 武田泰淳集』の「解説」、筑摩書房、1960年、421頁
- ¹⁹ Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay : Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China, London: Macmillan & Co. Ltd. 1912. (Reprinted 1987, New York: Dover Publications Inc.) (訳名:『中国砂漠地帯の遺跡: 中央アジアと中国西部の探検における個人的な報告』)。スタインの第2回中央アジア探検(1906-08)の成果を、一般向けに解説した旅行記。全2冊から成る。第1巻: インドからの出発からカシュガル・コータンの調査、ニヤ・エンデレの踏査、チェルチェン・チャルクククの遺跡概要、さらにロプノールでの発掘、ミーランの発掘成果、敦煌調査への出発までを含む。第2巻: 敦煌の千仏洞調査始まり、漢代長城の調査、漢代遺物の発見、さらに敦煌文書の発見について述べる。ついで瓜州から河西回廊の調査を概観し、天山南路のハミ・トルファン・カラシャール・クチャ・アクス・ヤルカンドを経てコータンの調査、さらにチベットを経てインドに帰還するまでを含む。本書に対応する本格的な調査報告書は、Serindia(全5巻)である。
- ²⁰ 武田泰淳「流沙」(1952)『武田泰淳全集増補版』第1巻、筑摩書房、1979年、338頁
- ²¹ 武田泰淳「『愛と誓い』あとがき」(1953)『武田泰淳全集増補版』第12巻、筑摩書房、1979年、300頁
- ²² 「私の自慢の本『セリンディア』」: 初出誌における原題は、「短編『流沙』の源流—『セリンディア』—」であるが、全集に収めるにあたって上記のように改めた。
- ²³ 武田泰淳「私の自慢の本『セリンディア』」(1968)『武田泰淳全集増補版』第16巻、筑摩書房、1979年、240頁
- ²⁴ 増田渉「武田泰淳氏との交友記(上)」(1971年8月)『武田泰淳全集増補版』第4巻付録月報3、1978年、17頁
- ²⁵ J.ミルスキー著; 杉山二郎 [ほか] 訳『考古学探検家スタイン伝』下巻、六興出版、1984年、364頁
- ²⁶ 同上
- ²⁷ 武田泰淳「宗教は統一できるか」(1966)『武田泰淳全集増補版』第18巻、筑摩書房、1979年、278頁
- ²⁸ 同上
- ²⁹ 武田泰淳「作家に聴く・武田泰淳」(1952)『武田泰淳全集増補版』第18巻補遺、筑摩書房、1979年、3頁
- ³⁰ 武田泰淳「文学を志す人々へ」(1962)『武田泰淳全集増補版』第15巻、筑摩書房、1979年、207頁
- ³¹ 武田泰淳「文学と私」(1975)『武田泰淳全集増補版』第18巻、筑摩書房、1979年、452頁
- ³² 武田泰淳「父子の情」(1952)『武田泰淳全集増補版』第4巻、筑摩書房、1978年、63頁
- ³³ Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay : Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China(vol.1), London: Macmillan & Co. Ltd. 1912. 117page
- ³⁴ ただし、保坂俊司は「シク教の思想—そのカースト制批判について—」(雑誌『東方』第2号、東方学院、1986)において、シク教のカースト制度否定について考察してきた。それに対して、Ruinsでは、シンがシク教徒なのに、カースト制度を認めていて、矛盾しているようである。
- ³⁵ 大川周明『回教概論』、慶応書房、1942年、139～140頁
- ³⁶ 武田泰淳「『愛と誓い』あとがき」(1953)『武田泰淳全集増補版』第12巻、筑摩書房、1979年、300頁
- ³⁷ Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay: Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China (vol.1), London: Macmillan & Co. Ltd. 1912.116page
- ³⁸ Marc Aurel Stein, Ruins of Desert Cathay: Personal Narrative of Explorations in Central Asia and Westernmost China (vol.2), London: Macmillan & Co. Ltd. 1912.422-423page
- ³⁹ 大川周明『回教概論』、慶応書房、1942、167～168頁
- ⁴⁰ 武田泰淳「流沙」(1952)『武田泰淳全集増補版』第1巻、筑摩書房、1979年、317頁
- ⁴¹ 花田清輝・武田泰淳、「東洋人の知性」(対談、

1965)『対話・歴史と文明』(潮新書33)、潮出版社、1968年、55頁

⁴² 武田泰淳・寺田透、「武田文学と仏教」(対談、1967)『日本の文学67 武田泰淳』付録、中央公論社、1973年、1頁

⁴³ 武田泰淳「私の自慢の本『セリンディア』」(1968)『武田泰淳全集増補版』第16巻、筑摩書房、1979年、240頁

【参考文献】

[中国語]

- (1) (英) 奥雷爾・斯坦因著；中国社会科学院考古研究所主持翻譯、『西域考古図記 修訂版』第1-5巻、桂林：广西師範大学出版社、2019年
- (2) 張存良「斯坦因中亞考察著作綜述」『西域研究』2012年第3期、新疆社会科学雜誌社、2012年
- (3) (英) 斯坦因著；巫新華訳、『沿着古代中亞的

道路』、桂林：广西師範大学出版社、2008年

- (4) (英) 奥雷爾・斯坦因著；巫新華、伏霄漢訳『斯坦因中国探險手記』第1-4巻、沈阳：春風文艺出版社、2004年

[日本語]

- (1) スタイン著；沢崎順之助訳、『中央アジア踏査記』(西域探検紀行選集)、白水社、2004年
- (2) 山田利明『中国学の歩み：二十世紀のシノロジー』、大修館書店、1999年
- (3) 三瓶達司『近代文学の典拠：鏡花と潤一郎』、笠間書院、1986年

[ウェブサイト]

- (1) 国立情報学研究所－デジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵』貴重書デジタルアーカイブ
<http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/sitemap/index.html#class1> (参照 2022-10-02)